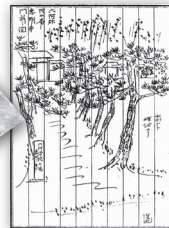
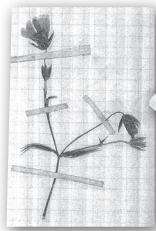


庭の荷風の庭



荷風の文芸空間に“理系感覚”という一本の補助線を引いてみる

訪問者 坂崎 重盛

雨蕭蕭 蕭根岸の里の御行松

さて、荷風『日和下駄』。

小説ではない、この本格的な意味としての、随筆？ エッセイ？ に、どれだけ多くの物書く人が言及したことでしょうか。で、ほくも尻馬に乗る。とはいえ気分次第のほくの玉稿、すべての項目に、あれこれふれるつもりもないので、第一の『日和下駄』の次、「第二 淫祠」は飛ばそう。

好きなんですけどね。向島近く、家のあったあたり、自転車でプラプラしたりしていると、小さな赤い鳥居があつて、そこだけ、なにやらビミョーな雰囲気。左右に白い陶器や石で形どった狐さんがいて、その前に小さな御酒の杯なんかも置いてある。

「淫祠」というと、今日の語感でいうと、なにか「○秘宝館」のアンテナスポットみたいを受けとられるかもしれないが、そんなことではない。荷風散人は、「石地蔵」「願掛けの絵馬」「お稲荷様」「石の嫗様」などなど、町の片隅にひっそりとある淫祠を紹介する。ま、それはいいとして、問題は、この一文の書き出し。句読点を入れて、たったの十四字。

—— 裏町を行こう、横道を歩もう。 ——

まいました！ この十四字に、荷風さんの人生、また命そのものが詠われているじゃないですか！

もう、これだけで「第二 淫祠」は飛ばそう。この挑発的にして、ありがたい。裏町横道人生訓である。

ほくは、この言葉を百円ショップで買った短冊に筆ペンで書きうつし、積んだ岩波書店『荷風随筆』の上に立てかけている。

そんなことはどうでもいい。文庫本で二ページほどの短い「淫祠」の中に、

ちよつと違和感？のあの言葉が、さりげなく置かれてる。

淫祠は「昔から今に至るまで政府の庇護を受けたこととはない」

「銅像以上の審美的価値がある」—— ほくが戦前の文芸関係の思想をチェックする立場の人間だったら、この二つの文言は見逃さないだろう。反国家、反体制の気配を発しているからだ。銅像に関しては、次の「第三 樹」の項にもチラッと出てくる。都市の中の醜さの例として、散人は銅像をかなり敵視している。日本近代国家権力の表徴として嫌悪したのである。

「淫祠」は飛ばして……などと記しながら未練がましく言わずもがなのことをのべてしまった。『日和下駄』次の「第三 樹」にうつろう。これはまた「荷風の庭庭の荷風」に恰好のテーマではないか。

「第三 樹」は一片の俳句から書き出される。それは「目に青葉山時鳥初鯉」。江戸中期の俳人・山口素堂による、あまりにも有名な一句。「目には青葉」と「は」が入るのが正しいとされる。初夏の季節の話などに、この句が披露されることが少なくない。

また、この句は俳句の常識的な型としてはかなり例外的なものとしても知られる。普通、一句の中に季語が二つあるものは、「季重なり」として避けなければならぬ。ところが、この句にはご覧のように「青



淫祠 町の片隅にある、庶民の信仰の証。写真は、ほくの本置場の近く、散歩エリアの道沿いにある「子女観世音」。花や飲み物が欠かさず手向けられている